キプリングの「ベルトランとビミ」：科学と宗教の関係

Rudyard Kipling, “Bertran and Bimi”: The Relation Between Religion and Science

高　橋　侑　希

目　次

1．はじめに
2．物語における構成と要素
3．時代が生み出したもの―科学と宗教の関係
3-1. 科学と宗教の蜜月時代
3-2. 科学と宗教、分離への道
4．物語と進化論
5．「3」を不完全にするもの
6．おわりに

1．はじめに

ラドヤード・キプリング（Rudyard Kipling, 1865-1936）の著「ベルトランとビミ」（“Bertran and Bimi”）の中で次のような会話がある。

‘... I will tell a dale dot you shall not pelief?’
‘There’s no tale in the wide world that I can’t believe,’ I said.
‘If you haf learned pelief you haf learned somedings.’（Kipling（a）、302）
「あなたが信じられない話をしようか」「広大な世界の中で私が信じることが出来ない話なんてものはない」と私は言った。「もし、あなたが信じる、ということを知っているのなら、何かを学んだことになるのだろう。」（拙訳）

この会話の中には、「信じる」という言葉が何度か出てくる。「ベルトランとビミ」という物語が出版された19世紀後半（イギリス）は正に信じるという言葉が重みを増し、そしてこの言葉こそが大変重要な位置づけになって来る時代である。よって、上文での会話こそが当時のイギリスの総体を語っていると考えられる。この論点に注目する上で、19世紀後半当時の背景、チャールズ・ロバート・ダーウィン（Charles Robert Darwin, 1809-1882）によって発表された、『種の起原』（*On the Origin of Species by Means of Natural Selection or The Preservation of Favoured Races in The Struggle for Life*, 1859）をはじめとした「進化論」の考え、宗教、科学との関係を交え、またその上で「ベルトランとビミ」の物語について考察し、この言葉の重みと位置づけを見出してゆきたい。19世紀後半、『種の起原』の発表を向かえた時期を経て、キプリングは『人生のハンディキャップ』（*Life’s Handicap*, 1891）という短編集の中で「ベルトランとビミ」の物語を描いた。

「ベルトランとビミ」の物語は次のようである。

物語の始まりは船上の上。マレー諸島で捕らえたオランウータンをイングランドへ連れ帰ろうとしているハンス（Hans Breitman）は、私（I）にマレー諸島での話をし始める。その当時、ハンスはベルトラン（Bertran）という人物に出会い、彼は１匹のオランウータン、ビミ（Bimi）を目にする。ビミはオランウータンではあるが、人間のように自分の部屋を持ち、葉巻を吸い、食事を

取り、ベルトランと手をつないで散歩をしたりする。ベルトランはビミを自分の子供同然だとも言う。そのような日常を繰り返す最中、ベルトランは１人の女性に出遭い結婚をする。そして、ベルトランと彼の妻、ビミという３人の暮らしが始まったある日、ベルトランとハンスがビミと妻を残してきた家に帰宅すると、ビミの姿も妻の姿もなくなっているのであった。そして、その10日後、ビミが森から姿を現しているのを目にし、ベルトランがビミを呼び寄せると、ビミは手の中に一束の長い黒髪（a long piece of black hair）を持ってやって来た。ベルトランはビミをまた家に招きいれ、一緒に過ごすのである。そして、幾日か過ぎ、ハンスが散歩に出かけ、戻って来たとき、ビミが死に、そしてベルトランがその上に覆い被さっているのを目にする。そこで、ハンスの語りは終わり、私（I）に「おやすみ、いい夢をね」と言って物語は終わる。

物語の中で特に浮きだって表れてくるのは、人間的な行動をするオランウータンのビミと人間ベルトランとハンスの存在、即ち動物と人間の関係と位置づけである。物語の中で繰り広げられる、ベルトランとビミの生活に、心理的な描写、即ち愛情や信頼といったものを彷彿とさせる描写を幾つも見て取ることが出来る。しかしながら、この物語が描かれた19世紀後半の世界を見ると、人間もまた動物の一部であり進化をしてきた、とするダーウィンによる進化の説が出、議論された時代ではあるが、多くの人々にとって動物が人間のように心理を持ち、行動をするということは話の中では理解出来ても、「確信」にまでたどり着くことは難しかったに違いない。そのことを理解する上で重要なものが、１つには、移り行く時代の中での科学と宗教の関係であろう。

そこで、本論ではまず、科学と宗教の分離の時代の中で生まれたキプリングの著「ベルトランとビミ」の物語の構成を分析する。この物語は、１つの物語の中に別の物語が埋め込まれているという枠物語（frame narrative）で描かれている。枠物語の概念は「別の物語が埋め込まれている物語。別の物語に背景を提供することによって、枠として機能する物語」（プリンス、69）と定義されている。それが３つの構成から成っている事に注目する。この「３」という構成の数字が、古くからさまざまな先人により定義されている「３」という数字が持つ意味（完全要素）とこの物語が実は関係性を持っているのではないか、という視点から考察する。次に、当時の科学と宗教の関係に焦点を当て、時代を経て、いかに科学と宗教の分離が起こってきたのか、また、そうした時代の中で生まれたダーウィンの『種の起原』が果たした役割について考察する。さらに、次節では、前節における進化論的な要素が物語の中ではどのような所に含まれているのかを探り、そして、「３」という数字の持つ完全要素に対するアンチテーゼとしての不完全要素を物語の中で考察する。このように物語を分析し、結論として先に述べた会話こそが19世紀後半の時代を総体的に語っているのではないか、ということを論じたい。

２．物語における構成と要素

物語、「ベルトランとビミ」は１つの物語の中にもう１つの物語を含む３つの構成からなっている。物語は、登場人物の１人、ハンスが自身の経験した事を語る前、ハンス自身の体験（語り）、ハンス自身の語り後の３つに分けることが出来る。即ち、「ベルトランとビミ」の物語はハンス自身の体験（語り）という枠物語を含む３つの構成によって出来ている。また、物語を読み解いてゆくと、物語構成の他にも捉えられる、「３」という要素がある。「３」という数字の要素、「３」という概念そのものの意味を捉え、改めて「ベルトランとビミ」を読み解いてみると、「３」という数字の概念が物語に深く組み込まれていることに改めて気づくのである。それでは、「３」という数字の概念には何か特別な意味があるのであろうか。

そこで、まず「３」という概念に注目していきたい。即ち数字の「３」そのものの概念である。そもそも人類の始まりはおよそ３万年ほど前であるが、数えるということが始まった時期は定かではないことになっている。

文字のなかった頃でも、集団の人数を数えたり、獲物の数を調べたりしている筈であるから、「数える」ことは人間の誕生とともに始まった、といってよかろう。この「数える」ことが発端となって、「数」の概念が形成されたのであろう、と推測することはできるが、この間の事情はまったくわかっていない（小堀、12）。

そして、「３」そのものの原理はアリストテレス（Aristotelēs, 前384–前322）やピュタゴラス（Pythagoras, 前570–?）の証明によって述べられている。ガリレイ（Galileo Galilei, 1564–1642）によれば、アリストテレスの「３」は「世界がどうして単純な直線でもなければ単純な面でもなく、長さ・幅・深さを備えた立体であるかを指摘するのです。そして次元というものは３つ以上にはなく、しかも世界はこの三つの次元をもっており、すべての次元をもっており、そしてすべての次元をもっているから完全だ」（ガリレイ（b）、20）と定義され、ここに「３」というものが完全性の意味を持っている、と捉えることが出来るのである。こうした「３」という完全性の意味を踏まえた上で、完全性としての「３」がどのように物語に表れているのかを考察してゆく。

そして、「３」には完全性の意味の他に、次のような捉え方もある。即ちガリレイによると、ピュタゴラスの「３」は「すべてのものは３つのこと、すなわち、はじめ、なか、おわりによって規定されている」（ガリレイ（b）、20）と述べられている。さらに、「３」の概念についてはこの他にも様々な捉え方がある[1]が、いずれにしても、「３」という数字が持つ意味は、完全性という要素、また「はじめ」、「なか」、「おわり」という意味の要素を持つのである。

次にこれを踏まえた上で、この「３」という数字の概念について「ベルトランとビミ」の物語にあてはめて考察する。物語の始まりは前述したように船上で始まる。この部分は、まだ、私（I）という人物が、ハンス・ブライトマンという人物の体験を聞く前、語りの入っていない最初、即ち「３」の概念でいう「はじめ」にあたる。次にハンスが私（I）に語りだし、物語はハンスの過去における体験という別の物語に入る。別の物語に入る、ということが、「３」の概念でいう「なか」にあたる。そして、語りが終わり、再び船上へと物語の時間軸は現在へと動き、私（I）とハンスが言葉を幾つか交わし、ハンスが「おやすみ、いい夢をね」という部分が物語の終幕、「おわり」にあたり、通して「３」という概念を基にした物語の世界が出来ているのである。「はじめ」、「なか」、「おわり」が揃い、「３」の概念でいう１つの完全性が成り立っているのである。

そして、「３」は完全性を示す要素を持つと同時に、もう１つ宗教の上で重要な意味を持つ要素がある。三位一体というものである。宗教ーキリスト教において三位一体とは「神のあり方を表そうとするために、後の神学の発展の中でギリシア哲学の概念を用いて考え出されたいわば造語で、神には「父」と「子」と「精霊」という３つの位格（ペルソナ）があるが、この神は３種類の神ではなく１つの本質（実体）である、ということを意味している」（宮越、22）。そして、三位一体という言葉そのものは聖書にはないが、それを暗示する表現がある。たとえば、「父と子と精霊の名によって洗礼を授けなさい」（マタイ28・19）」（宮越、22）ということである。三位一体という言葉そのものは聖書には書かれてないにしろ、それを示唆するような表現があり、その聖書に重きを置くキリスト教をイギリスは国教としている。「３」という要素には三位一体という要素も含まれるが故に、「３」の構成がイギリスという１つの国を象徴的に示していると捉えることも可能なのである。だからこそ、物語、「ベルトランとビミ」が枠物語で書かれ、そこに完全性を示す「３」という要素が含まれていることに加え、それがまた19世紀後半当時のイギリス、大英帝国という国を暗に示す三位一体としての「３」とも読めるのである。そして、完全性を示す「３」とそれが同時に大英帝国という国を暗に示していることを考えると、１つの国としての権威の象徴としても見えるのである。

また、橋本槇矩によると、「ジョン・ロックウッド・キプリングの世代と息子のラドヤードの世代には「英国は支配するべく運命づけられている、世界に文明の火を点し、平和をもたらすのだ」という信念があった」（橋本（a）、14）とある。英国はこのような信念を掲げる事により、自国が権威をふるうことがいかに相応しいかを示したのである。だからこそ、完全性や権威の象徴とも取れる「３」の要素で組まれた物語はまさに、英国の信念を表象したものである、と考えることは可能であろう。

３．時代が生み出したもの
―科学と宗教の関係

このように、「ベルトランとビミ」は「完全性」即ち、１つの国の権威の象徴とも読める「３」で構成された物語である、と読むことが出来る。しかし、当時の19世紀におけるイギリスの姿を考察すると、同時にイギリスという国が「完全」であったとは言い切ることの出来ない時代でもあったのである。では、なぜ、イギリスが「完全」とは言い難かったのであろうか。その糸口として19世紀から遡り、科学と宗教の関わりについて考察する。

３－１．科学と宗教の密月時代

1859年、チャールズ・ダーウィンによる『種の起原』が発表される更なる以前、科学と宗教を揺るがす出来事があった。それこそは宇宙に関するものであり、古代ギリシア時代に確立されたプトレマイオス（Ptolemaios Klaudios, ２世紀頃）の天動説とアリスタルコス（Aristarchos, 前320–前250）の説を元に生まれたコペルニクス（Nicolaus Copernicus, 1473–1543）による地動説という２つの説があった中、ガリレオ・ガリレイ（1564–1642）は『二大世界大系についての対話』（1632年）、即ち一般に知られている呼び方で言うならば『天文対話』を発表した。そもそも天動説とは、広辞苑によると、「地球が宇宙の中央に静止し、日月星辰はその周囲をめぐるという古代の宇宙構造説」である。また、「アリストテレスは世界を二つの領域、月下界と月上界に分けた。地・水・空気・火の４つの元素からなる月下界は地球の領域であり、あらゆるものが生成しては消滅してゆく変化きわまりない世界である。天空の領域である月上界は第５の元素エーテルから出来ており、そこはなにひとつ生滅しない、永遠不変の完全世界である」（山田、162）という天動説に対し、地動説は広辞苑によると、「太陽は宇宙の中心に静止し、地球は太陽のまわりを回転するという説」であった。この２つの説が存在する中、遂に時代は15世紀から17世紀前半にかけて、ヨーロッパにおける大航海時代を迎える。大航海時代を迎え、コロンブス（Christopher Columbus, 1446頃–1506）やヴァスコ＝ダ＝ガマ（Vasco da Gama, 1469頃–1524）といった多くの航海士たちはそれまでにいた内陸の世界から海へ出て行くようになり、遂には世界一周の航海がなされる。イギリス、スペインを始め、ヨーロッパの国々は、新たな大陸の発見や自らの国の更なる発展のために、競いあって海へと出るのであった。同時に、技術も発達してゆき、16世紀、聖職者でもあり、天文学者でもあったコペルニクスは、古代ギリシアのアリスタルコスの思想に基づき当時定説であった地球中心の宇宙説に対し、地動説という太陽中心の宇宙説を説いた。そして、17世紀、人間の肉眼では見る事の出来なかった、もっと大きな世界を見る事の出来る顕微鏡や望遠鏡が発明された。「ガリレオがはじめて望遠鏡を天空に向けたのは、1610年のはじめであった」（山田、158）と述べられているように、ガリレイは望遠鏡を使い、遂に核心に迫る発見をするのである。そして、『星界の報告』（1610年）、『天文対話』（1632年）によりガリレイは、自らの説をコペルニクスの地動説を後押しするような形で発表したのであった。しかし、「ガリレイはコペルニクスの体系を教えたという理由で、法王から有罪の宣告を下された」（ランケ、204）のである。16世紀コペルニクスの発表から、17世紀ガリレイの発表の時代まで、科学を始めさまざまな技術が大いに発達した。それによって、定説であった天動説をうち砕いた時代を迎えたかに見えたのであるが、実際は天動説を

地動説が完全に打ち砕いたとはいえなかったのである。では、時代は変わっていなかったのであろうか。否、16世紀と17世紀の時代の風潮はしかし、確かに異なった側面を持っていたのである。

> 16世紀の文学、および17世紀初頭の文学も依然として、神学的色彩がきわめて濃厚であった。いかなる時代においても、その当時ほど、教養および一般に教会の諸制度が緊密に国家と結びつけられていることはなかった。教会の原理は、それぞれの国家において、支配的な地位を占めるにいたったのである。なぜなら、各国家はおうむね自らをローマの法座により解放したとはいえ、それぞれの特殊な信条に最大の熱心さをもってすがり、この信条は彼らの法則となったからである。かくしてこれら諸国民の生活と文学とは、完全に神学的な色彩を帯びるにいたったのであった（ランケ、204）。

このように、16世紀は神学的色彩が強かったのである。その一方で17世紀は、次のような風潮になっていた。

> 17世紀の後半になると、事情は一変した。人々はむしろ、15世紀を支配していた傾向の方へ、すなわち、今まで神学上の論争のために後方に追いやられていた哲学や自然科学の方向へ、帰っていった。一言でいえば、人心はふたたび、神学的なものから比較的離れた転向を示し、一層自由で一層束縛を受けない立場で事物の本質を探ろうということになったのである（ランケ、204）。

「一層自由で一層束縛を受けない立場で事物の本質を探ろう」（ランケ、204）という時代であったように示されているが、定説であった天動説に相反する地動説、それをガリレイが望遠鏡という発達した技術を使い発見し、地動説を後押しした事は、「法王からのガリレオの有罪」という形の宣告を受けるのである。ここで、当時の時代における科学というものは、宗教というものに確かに密接しあって、あるいは切り離して捉えることは出来なかったことが伺えよう。そもそも、『オックスフォード英語辞典』（*OED*）（*The Oxford English Dictionary*）によると、“scientist”という語が初出されたのが1834年、「ひとつの学問について専門的な知識を有するもの」（“A person with expert knowledge of a science”）という意味を示すものであり、「サイエンティスト」という用法は、16世紀、17世紀は勿論、19世紀を迎えた時代においてもなかったのである。

> 科学者はまだサイエンティストではなく、「ナチュラル・ヒストリアン（博物学者）」と呼ばれていた。「サイエンティスト」という用法は、二十世紀になってからのものである。「バイオロジー（生物学）」という語だって実は新しい（高山、106）。

３－２．科学と宗教、分離への道

確かに天動説というこれまでの定説を覆す地動説が存在した時代。そして、そこに、キリスト教に大きな影響を与えることとなるダーウィンの『種の起原』（1859年）というものが現れる。ヨーロッパ世界において時代の経過により技術が発達し、たどり着いたものは、キリスト教の根底となる『聖書』で描かれた世界観とは、全く異なった世界観であった。『聖書』で描かれた「人類の誕生」と、時代の経過によって生み出された「人類の誕生」とは必ずしも同様とはいえなかったのである。聖書での生物の出現した過程は次のようである。

> 生物が地球上に出現した順序は、“植物、種を生じる草、種のある実を結ぶ果実→海の巨獣、水に群がりうごめくすべての生き物、翼あるすべての鳥→野の獣、家畜、地のすべての這うもの→人”ということになる（藤井、243）。

また、『聖書』で示されるように、人は神自ら

によって形作られたものとなっているのである。「種は個々に形成された」ことになっている。大航海時代の中で新大陸の発見を経て、19世紀に至る中、航海をするということは新しいものに触れ、例えば新種の生物に触れるということにつながっていく。新しいもの、に触れる概念はその航海に居合わせた者だけではなく、本国にいる人々にももたらされ、特に見たこともなかった新種の生物は、生物を研究するものにとって大いに研究意欲をそそることになったのである。イギリスの博物学者（生物学者）ダーウィンもビーグル号という船で航海をする。そして、後に『種の起原』（1859年）を発表するのである。『種の起原』の序章は次のように述べられている。

> 私はここに、種の起原に関する学説の沿革を簡単に述べておく。最近まで博物学者の大多数は、種は不変の生成物であって、各々別々に創造されたものであると信じていた。この見解は多くの著述家により巧みに擁護されてきた。一方、ある少数の博物学者だけは、種は変容を受けるものであること、現存の生命形態は先行形態の真実の世代連続による子孫であることを信じてきたのである。古典的な著述家でこの問題を暗に論じたものもあるが、それはしばらくおくとして、近代で科学的精神に立脚してこの問題を論じた最初の著述家はビュフォン（Buffon）であった（ダーウィン、vii）。

ダーウィンの『種の起原』に至るまでも、生物については多くの学者達によって研究がなされてきた。実際、ダーウィンの『種の起原』より以前に『フランス植物誌』の著者でもあるフランスの博物学者ラマルク（Jean Baptiste de Monet, chevalier de Lamarck, 1744–1829）は、「種種は別々に創造されたものではない」のではないかという考えを示していた。「種種は別々に創造されたのではない」ということを裏付けるかのように、『種の起原』の４年後、解剖学者トマス・ハクスリー（Thomas Henry Huxley, 1825–1895）によって『自然界における人間の位置』（*Man's Place in Nature*, 1863）という三部作で構成された論文が発表される。

> ハクスリーは広範な知識に基づき、説得力のある、形態上の論争点を提起し、人も動物であり、霊長類であることを認めたのだ。イヌもしくはサルが哺乳類であるなら、ヒトもまた哺乳類である。ゴリラが霊長類であるなら、しかも高度に進化した霊長類なら、ヒトも霊長類だ、と主張したのだ（シュワルツ、89）。

ヒトは突然に「創造」されたのではなく、ある過程を経て「進化」したということになるのである。ダーウィンやラマルクによる「種種は別々に創造されたのではない」という考えや、ハクスリーによる「ヒトもまた霊長類」であるという考えから、確かに「種は進化する」という考えが息づくのである。しかし、それは『聖書』に描かれた、天地創造による天地のはじまり、人類の過程とは異なっており、果たして聖書に記されたものは正しいのか、という疑問がそこで重く圧し掛かってきたのであった。科学者の中にも進歩派の科学者達と保守的な科学者達へと分裂し始めるのである。進歩派の科学者達（ハクスリーを含む）は宗教からの「科学の自立」を目指したが、一方保守的な科学者達は次のような宣言をする。

> 我々、ここに署名した自然科学の研究者は、科学的真実の探求が捻じ曲げられ、聖書の心理と信頼性に疑問を投げる根拠とされることがある現状に、心から遺憾の意を表明したい。我々は自然という書物に書かれた神の言葉と、聖書に書かれた神の言葉が、いかに違って見えようとも、互いに矛盾することはありえないと考えている。我々は、自然科学が完全ではなく、進歩の途中の段階にあり、今は我々の有限な理性によって、鏡で見るようにおぼろげに見ているだけであることを忘れていない。我々は、この二つの記録が細部に至るまで一致するとみられるようになる時が来るこ

とを確信している（松永、318）。

進歩派学者（その１つにXクラブ。1864年11月３日、ハクスリーら９名で設立）と保守的な科学者（その１つにヴィクトリア協会。1866年５月24日設立）によって宗教に関係した科学者の立場までもが分かれるようになるのである。そして1864年11月30日、優れた学術研究に与えられていた王立協会のコプリー・メダルがダーウィンに授与されたことは、科学擁護の立場をとり1880年代までイギリスの科学界に決定的な影響を及ぼし続けたXクラブの最初の成果であったが、その後ますます科学者達の立場は分裂し、「科学」と「宗教」は分離の道に向かっていくことになる。

> 科学者たちは、科学の存在理由をキリスト教に求める必要をみとめなくなった。科学者たちは、世界の理解と生活の向上にとって、宗教よりも科学の方が有益であると主張し始めた。19世紀前半までの科学の実績に自信を持った科学者たちは、科学を宗教から離れた独自の存在とみなすようになった（松永、364－365）。

以上に述べられているように、17世紀ガリレイが、天動説という説に対しコペルニクスの地動説を後押しし、法王により有罪と処せられた当時は、科学と宗教というものが、はっきりと分かれていなかったが、19世紀を迎え、ダーウィンの『種の起原』を通して生まれた「進化論」の説を始めとする研究成果により、確かに、「科学」と「宗教」の亀裂が拡大してゆくことになったのである。

４．物語と進化論

２節では、「ベルトランとビミ」という物語の構成から、「３」という要素が浮かび上がり、その「３」が完全性や権威を表すものであり、まさにイギリスが支配する側にふさわしい権威の象徴としても暗に読めるという事を示唆した。しかし、次の３節で述べたように、イギリスにおいては「科学」と「宗教」の揺れが起こり、必ずしもこの国は完全とは言い難いものであった。そこで、４節では物語の登場人物、オランウータンのビミ、ベルトラン、ハンス・ブライトマンを取り上げ、彼らが持つ特徴と「進化論」を照らし合わせ、この物語は進化論が反映された物語ではないかと示唆したい。物語の中では『種の起原』やダーウィンといったような明確な単語は現れていない。しかし、『種の起原』やダーウィン、「進化論」に結びつくような単語は幾つか物語の中に現れてくるのである。

例えば、オランウータンのビミというオランウータンという動物と、物語上に出てくる地名マレー諸島（Malayan Archipelago）は、進化論を語る上で重要な意味を持ってくる。マレー諸島は、博物学者ウォレス（Alfred Russel Wallace, 1823–1913）がオランウータンの生態を研究していた地でもある。そしてまた、ハクスリーが論文の中で述べた「イヌもしくはサルが哺乳類であるなら、ヒトもまた哺乳類である。ゴリラが霊長類であるなら、しかも高度に進化した霊長類ならヒトも霊長類だ」（シュワルツ、89）という点も注目すべき部分である。19世紀（20世紀）、科学の世界では「オランウータン」が「人間の祖先」であるのかは明らかにはなっていないにしろ、「ヒトは確かに進化を経てきたものだ」という説があることから、「オランウータン」も「ヒト」の「進化」の一部に関わっているという考えに発展させることは、ウォレスを始め研究を進める科学者達（当時でいうと博物学者）、そしてキプリングにとっても、重要な点であったように見える。最も、だからこそ、「オランウータン」であるビミに、ベッドとシーツのある部屋で寝かせる、葉巻を吸う、散歩をするという行動を取らせることにより、ヒトと動物であるビミとの距離感を近くし、そうすることにより、進化という過程を暗に示しているのである。即ち、「オランウータン」であるビミを「進化論」という存在に重ね合わせることが出来るのである。

また、キプリングは『なぜなぜ物語』（*Just So Stories*, 1902）の中で「ぞうのはなはだれがひき

のばしてくれた」（“The Elephant’s Child”）という物語を書いている。19世紀後半、ダーウィンが自然淘汰説を論じた頃、既にその説に対抗する形としてのラマルクによる獲得形質の遺伝という説（ラマルキズム）があった。エルドリッジによれば「キリンの首はどのようにして長くなったのか」という有名な問題に対する両者の説明は自然淘汰説と獲得形質の遺伝の違いを如実に表しているが、その後キプリングによって書かれた『なぜなぜ物語』は、これらの進化の説を人々に判り易く伝えたという点で一役かっていたと指摘されている（エルドリッジ、73）。また、『一日の仕事』（The Day’s Work, 1898）という短篇集の１つ、「橋を造るものたち」（“The Bridge-Builders”）の中でも進化論の繋がりを感じることの出来る言葉がある。牡虎が猿に向かって、「人間はおまえのかけらから生まれたと言われているじゃないか。」（キプリング(c)、163）（‘that these men came of the wreck of thy armies,...’）（Kipling（c）、25）と言うのだ。霊長類である猿と人間の繋がりが窺えるのである。このように、確かにキプリングが「生物の進化」に関心を持っていたことが窺い知れるのである。

ベルトランという人物は、‘He was a Frenchman, und he was good man－naturalist to his bone’（Kipling（a）、302－303）とあるようにフランス人で根っからの博物学者であることが語られている。しかし、“naturalist”という語にはまた他に「自然主義者」という語がある。*OED* によると、博物学という意味を経て後に自然主義という意味が出てきたことになる。自然主義とは19世紀フランスを中心として起こっていたのである。

> 文学で、理想化を行わず、醜悪なもの、瑣末なものを忌まずに、現実を唯あるがままに写しとることを本旨とする立場（広辞苑）。

という自然主義が、19世紀の末頃フランス中心に起こっていた。この当時の背景と、フランス人であり、自然主義であるベルトランという要素には意味が無いわけがなかろう。実際物語上で、「人間のような行動」をするビミを「私の子供同然だ」とベルトランはいい、確かに「オランウータン」であるビミと「ヒト」の距離の関係を隔てたものに区別するのではなく、ごく近くのものとして「あるがままに写しとっている」のである。だからこそ、動物であるビミを子供、姿かたちは違えど「ヒト」という同等の位置に属させるからこそ、ここではベルトランという人物が「進化」、即ち「進化論」を肯定しているようにも読めるのである。

そして、ハンスという人物は、ドイツ人である。ハンスは「オランウータン」であるビミの姿を見、何度か「獣ではない、ヒトなのだ」（‘He was not a beast; He was a man.’）（Kipling（a）、303）と言うのである。ここに、「進化論」という要素をつなげると、確かにハンスという人物が「進化論」を認めているように捉えることも出来るのである。しかし、物語を読み進めてゆく中で、必ずしもそのようには言えない部分にも遭遇するのである。しかしながら、それは、ベルトランが結婚する際、「ハンス、ビミはどうするのだ」と言い、「ベルトラン、もし私があなたなら、私は妻への結婚祝いのプレゼントとしてビミの剥製（ぬいぐるみ）を送るさ」、（“If I was you, Bertran, I would gif my wife for wedding-present der stuff figure of Bimi.”）（Kipling（a）、304）、「とにかく、ビミを殺せ。彼は嫉妬で狂ってしまっている。」、（“For any sakes, kill Bimi. He is mad mit der jealousy.”）（Kipling（a）、305）と言いビミを獣ではない、ヒトであるという反面、ビミという存在をなくすということ、すなわち進化論に重ねられた「オランウータン」、ビミという存在の証をなくしてしまうこと、極端に言ってしまえば「進化論」を否定的位置に属させる要素としても捉えることが出来てしまうのである。しかし、いずれにせよ、確かに「オランウータン」であるビミを、「獣ではない、ヒトなのだ」ということから「オランウータン」と「ヒト」とを距離的に近づけさせている。また、ハンスやベルトランが「進化論」を肯定的

に捉えるにせよ、否定的に捉えるにせよ、確かに、彼らは目にしたのだ。「動物、オランウータンが人間のような行動をとること」を。だからこそ、物語の中で「はじめ」、「なか」、「おわり」の「なか」にあたる、ハンスの語り、過去の場面は「進化論」を目の当たりにしたことの物語の中での「確かな証拠」となるのである。よって、「ベルトランとビミ」は「進化論」を舞台に語られていると捉えることを可能にするのである。

5.「3」を不完全にするもの

このように、この物語が「3」という概念に基づいた物語であると同時に、「進化論」を舞台に語られた物語として述べてきた。しかし、「3」という概念はアリストテレスが述べるように完全要素という側面を持てども、数字が「4」、「5」…と続くように「3」が必ずしも普遍的な完全ではない、という側面もまた同時に持っているのである。次にその側面について考察する。

> またぼくは足について、3という数3［本足］は4［本足］や2［本足］の数より完全である［つまり3という数が完全であるからといって4本足の動物や2本足の人間が3本足であればより完全になる］ということはわかりませんし、そうは思いません（ガリレイ（b）、22）。

上文にもあるように、「3」という概念は必ずしも完璧ではない要素を内包しているのである。ならば、「ベルトランとビミ」の物語の中にも、このような揺れ、完全とはいえない要素を内包していたのではなかろうか。物語、「ベルトランとビミ」において完全要素を砕くものとはなんであろうか。

第1は、ベルトランが結婚した女性の存在である。女性の描写は何度か出てくるが、特に注目すべき点は、物語の中で彼女自身の肉声とも言うべき言葉（セリフ）が無いのである。前述したように、物語の要素として当てはめた、「はじめ」、「なか」、「おわり」の中の「なか」にあたる部分の登場人物はビミ、ベルトラン、ハンス、そしてベルトランが結婚した相手である女性なのである。言葉（セリフ）を敢えて持たせないことにより、あくまでも、ビミ、ベルトラン、ハンスという「3」（人）を浮き立たせ、「3」を確立させているように感じることが出来る。同時に確かに女性の存在があることに、第4の存在としての女性が出てくると捉えることも出来よう。さらに、物語の要素として当てはめた、「はじめ」にあたる部分、即ち物語の冒頭部分での登場人物はビミではないが、檻に入っているオランウータン、ハンス、I（私）であり、「3」（人）を浮き立たせて読むことが出来るが、第4の存在として女性の存在が物語の要素としてあてはめた「なか」の部分に存在するように、「はじめ」にあたる部分にも第4の存在として牛や船員の存在や彼らの鳴き声、声がした表現がある。物語の中で「会話」、としての声を持つ者は、「はじめ」にあたる部分ではオランウータンを前にして話す、ハンスとI（私）であり、「なか」にあたる部分（ハンスのマレー諸島にいた時の物語の世界）では、オランウータンのビミについて話すハンスとベルトランが言葉（セリフ）を持って会話を行うのである。そして、物語の要素の「おわり」にあたる部分で登場してくる者はオランウータン、ハンス、I（私）であり、「オランウータン」について話し、言葉（セリフ）を持って会話を行う者はハンスとI（私）である。物語の要素、「はじめ」、「なか」、「おわり」にあたるいずれの部分も「オランウータン」が中心となり、そして言葉（セリフ）をもって会話を持つ者は2人、ハンスと私、またはハンスとベルトランなのである。このように、「3」という概念に基づいた物語の要素が確かにあるにしろ、「3」という完全要素にたいしての不完全をあらわす要素も又、同時にあるのである。

また、ハンスが標準英語を使っていないという特徴もある。ハンスはドイツ人である。この点から考察すると、ドイツ語における定冠詞の“der”は英語でいうところの“the”にあたり、接続詞の“und”は“and”、前置詞の“mit”は“with”

にあたるという推測も可能であろう。例えば、“For any sakes, kill Bimi. He is mad mit der jealousy.”（Kipling（a）、305）という文に、“mit”を“with”に、“der”を“the”にそれぞれ置き換えると、“For any sakes, kill Bimi. He is mad with the jealousy.”となるのである。上石実加子によると、キプリングがドイツ語訛りの英語を使用する以前に、その草分け的存在としてリーランド（Chales Godfrey Leland, 1824-1903）が詩の中で使用していたことがわかる。また、ドイツ語訛りには特徴があり、ゲルマン語とインドーヨーロッパ語との間に見られる子音の音韻推移の規則対応が見られるという特徴を体系化したグリムの法則の特徴を用いた上での使い方があらわれている。

> One of this style's prominent peculiarities is easily perceived. For example, as quoted above, in the language of Leland, “give” became “gife”; party—barty; they—dey; piano—biano; two—dwo; playing—blayn'; love—lofe; when—vhen; every—efery; as—ash; etc. This consists in the constant confoundingof the soft and hard consonants; and the reader must bear it well in mind when translating the language that meets his/her eye into one that becomes intelligible to his/her ear（Ageishi, 125）.

ハンスはあくまでも、標準英語を話さず、ドイツ語訛り的な話し方なのである。キプリングにとってドイツ語訛りを話すハンスの存在には何か意図があったのであろうか。そこで、ドイツ語自体に注目してみると、キプリングが生まれる以前、ドイツでは、ある大きな動きが生まれつつあった。それは、グリム兄弟（Jakob, 1785-1863、Wilhelm, 1786-1859）がドイツ語辞典（1961年完成）の編纂を着手した事である。「グリム兄弟はナポレオン以後、今こそドイツ文化の再建と振興に邁進すべきときが来たと深く悟ることがあった。彼らは互いに協力しつつ、完全なドイツ語の完成と全国的統一を目指し、ドイツ文法、ドイツ語辞典の編纂に着手した」（山中、228）。ドイツという一国家は、ドイツ語という自国の言語の完成を目指すことにより、自らの国をより強固なものにすることを目指したのである。

> キプリングはボーア戦争の後に英国に暗雲が垂れ籠めて、再び、戦争が生じるとすれば、その相手はドイツであると既に1897年の時点で予言していた。彼はその頃から絶えずドイツに関する情報を集めて、ドイツがやがて英国に戦争を仕掛けてくるとかたくなに思い込んでいた。英国がボーア戦争の轍を踏まないように国防体制を整えるべきだと彼は絶えず主張した（橋本（b）、361－362）。

キプリングの視線の先には常にドイツという国が映っていたのではないだろうか。上石実加子によると、「ベルトランとビミ」の物語は「大国イギリスが、1871年になってはじめて統一を果たし遅まきながら植民地戦線に乗り出してきたドイツへの脅威を物語るテクストとしても考えられてくるだろう」（上石（c）、21）と述べられている。「ベルトランとビミ」の物語の中で、標準英語が使われている一文を大英帝国という一国家としての象徴と捉えるならば、ドイツ語訛りに話された一文は、大英帝国にドイツという国の力が浸透してきた、とも捉えることが出来、またその反面、大英帝国という国の力がドイツへと浸透していった、とも捉えることが出来るのではなかろうか。そこに言語の表象を使った上での大英帝国とドイツの力のせめぎあいを窺うことも出来るのである。いずれにしろ、ドイツ語訛りに話させることによって、１つの国（大英帝国）がある意味不完全であったことを示唆していることが窺えるのである。

そして、第３は「ベルトランとビミ」という物語が「３」の持つ要素から完全性としての一国家（この場合では大英帝国）として読む中でのダーウィンによる「進化論」という考えの位置づけである。イギリス、大英帝国は先にも述べたように、

キリスト教を重きに置いていたが、19世紀後半当時発表されたダーウィンによる『種の起原』は、聖書の中で示されたものとは相反したものであり、かの国の人々に衝撃を与えるものであった。「なぜならば、それはキリスト教的な自然界に神の恩寵のあまねく存在するという信仰を全面的に否定しているからです。神の愛がこの世界を支配していることを素朴に信じている人々にとっては、これは到底容認できないものだったのです」（荻野、243）。純粋にキリスト教を信仰する者にとって、『種の起原』からなる「進化論」の説は信じ難いものであったに相違ない。だからこそ、「３」の要素からなる物語が完全性、（キリスト教を重きに置く）大英帝国という国を象徴しているならば、それと同時に到底容認できないものであるはずの『種の起原』からなる「進化論」という考えを物語の登場人物たちの言葉（セリフ）に散りばめることは、かなり異質なものであったろう。しかし、大英帝国という一国家を支えてきた帝国主義は、19世紀から20世紀への変わり目において期せずして衰退してゆくのである。そのような中、キプリング（そして、当時の帝国主義者たち）はイギリスをローマと重ね合わせていた。宮尾レイ子によれば、キプリングはただローマの衰退してゆく姿だけを重ね合わせただけではなく、国が生まれ、繁栄し、やがて栄えるがゆえの論理によって衰亡するという１つの完結した歴史循環においてその過程の姿をも重ね合わせていたのである（宮尾、290）。帝国主義の時代、イギリスは植民地を広げ、人々は繁栄を謳歌してきた。繁栄の裏側では、都市の衰退が始まり、貧困の差は加速的に広まってゆくのである。しかし、繁栄が生んだイギリスの雰囲気があったからこそ、彼らにとって到底容認できない筈の『種の起原』からなる「進化論」の説が闇に打ち消されられることなく、息づいたのである。

> ヴィクトリア朝はまさに昼下がり、太陽は中天高く昇り、未来永劫の進歩の夢に酔いしれ、世のなかには楽天的気分が横溢していました。それが、ダーウィンの著作の抱懐している恐るべき異端をもある程度許容し、受容するだけのゆとりを生んだと思います（荻野、237）。

帝国主義という意志を掲げ、権威を誇ろうとしたイギリス。だが、それも過ってのローマと同様に衰退の道に向かってゆくのである。そのような時代の中で生まれた『種の起原』は、確かにキリスト教を純粋に信じるものにとっては受け入れがたいものであったろう。ラマルクを始めとした博物学者など多くの学者たちが培ってきたもの、それが時を経て実を結び、種子となり、更に新しい花として、『種の起原』を生み出す背景となった時代、それが19世紀後半のイギリスという国であったことは事実である。だからこそ、一国家、イギリスは帝国主義、キリスト教に重きを置きながらも、相反する位置に存在する『種の起原』を内包したのであり、一国家というものが不完全性を同時に持つことを示すものであるように感じる。

６．おわりに

19世紀、イギリスは産業革命を経て、植民地の範囲を更に拡大し、一国家の権威を掲げる国としての強さを誇っていた。一国家の権威としての強さは、完全性という意味を持つ「３」で構成された物語、「ベルトランとビミ」からも読み取ることが可能である。しかし、当時のイギリスの姿を考察すると、これまで、イギリスが築き上げてきた「科学」と「宗教」の関係が多いに揺れた時代であり、２つの関係が分離という方向へ強まった時期でもあり、イギリスが完全であったか、というと必ずしもそのようではないことが窺えた。繁栄が生んだイギリスの中で楽天的な雰囲気があったからこそ、聖書で書かれたものとは相反するもの、『種の起原』からなる「進化論」の説が受容されたことも事実である。

そして、「科学」と「宗教」は次第に分離の道をたどり、17世紀、コペルニクスの地動説を是認したガリレイは、法王からの有罪によって地動説の放棄を強要されたが、20世紀（1992年）、この判決が不当であったことが認められるのである。

このことからも、「科学」と「宗教」の分離が窺うことができる。

物語「ベルトランとビミ」は確かに「進化論」の話を反映しているように読み取ることが出来るのである。けれど、「確かにヒトは進化をしてきた」のだということに対し、物語上ではどちらが真実（または正しい）のであるのかははっきりと示されていない。だが、確かにビミという人間のような行動をとる「オランウータン」が物語上に登場してくるのである。そして、物語は、ビミの死とその上に覆い被さっているベルトランの姿で終わる。『進化論の挑戦』という本の中で、佐倉統は、「進化は「進歩」ではない。無方向性の「変化」である」（佐倉、20）と述べている。もしかしたら、自然科学が大きく発展した19世紀の時代精神そのものである、優生学や優生思想の矛盾をキプリングは密かに心の内に持っていたのかもしれない。

キプリングは「リスペス」（“Lithpeth,”1888）という作品の冒頭に詩を付し[(2)]、芦川和也はこの詩は「愛を追い出しておきながら、どのような神に仕えよと言うのか。私はキリスト教や三位一体のもとを去り、自分の故国の神々のもとへ帰る。その方がより大きな安楽を得られる」（芦川、88）というような内容だと述べている。完全である筈の要素の中には常に不完全である要素もまた同時に内包されているという現実と矛盾。その矛盾の中で、どこかに「完全」の線引きをしないではいられない人間の業と宿命は、建前としての人格と本音としての内なる人格の中で大きく揺れ動くに違いない。キプリングは、帝国主義の全盛期から斜陽に差し掛かる大英帝国で生き、支配するイギリスと植民地として支配されるインドの両方で生きた。その大きな時代と社会のうねりの中で、帝国主義の旗手と拝された彼の目には、人間と動物、人間と人間の融合の可能性が、実は文学的というより以前に現実的に、そして確かに映っていたのではなかろうか。

自然の中での様々なものについての位置づけは、時と共に大きく変化してきた。同様に、人間の世界でも位置づけは変化する。中世の時代、王や貴族といった身分の者が上に立ち、それによって社会や国家が機能してきた。しかし19世紀に近づくにつれ、民衆の位置も変化してゆく。それをもたらしたのは19世紀に至るまでの文明の発達であり、その中で暮らしてきた人間の知性の発達でもあった。しかし、人間の知性の発達といっても、単純な意味で昔の人間の知性が劣っていた、ということではなく、人間と人間との関係、人間そのものへの認識に対する「知性」という点についてである。「知性」の中で人間は平等であるという考えがある反面、その中でさえも確かに上下関係があるという、相反する現実の中で、「科学」と「宗教」が存在するのである。そこで、「信じる」ということこそが真の問題となってくる。「信じる」ということは、人間が生来持つものであり、それを当然のように感じる。しかし、その「信じる」ということが重要な意味を増してゆくのは19世紀、近代へと続く時代であろう。「信じる」という言葉を「科学」と「宗教」に当てはめると、「科学」を信じるにしても、「宗教」を信じるにしても、確かに「科学」と「宗教」はこの世界に常に、そして同時に在ることをあらわしている。「科学」と「宗教」は時として天秤の上に置かれたが、19世紀の世界、特にヨーロッパではその天秤が大きく揺れ動いたのである。

ラドヤード・キプリングの物語「ベルトランとビミ」はそうした19世紀の光と影を内包し、総体的に語りかけたものであり、その象徴が正に冒頭の会話であるのである。

注

(1) 「３」の捉え方には次のようなものがある。「ピュタゴラス派は、限定できない単一性が２つの対立する力に分割されてこの世界が創造され、さらに三位単一性（tri-unity）に分割されて生命が生み出されたと主張した。」（エントレス、シンメル、62－63）また、老子によれば、「道は単一性を生み出し、単一性は二重性を生み出し、二重性は三重性を生み出し、３つ組はすべてを生み出す」（エントレス、シンメル、62）とされ、「1903年、ドイツの学者R・ミュラーは物語、詩、および造形芸術の中に現れる「３」の重要性を説明しようとして、「３」

の重要性は自然の観察から生まれると主張した。（中略）すべての生命は始まり、盛り、終わりという３つの局面の下で現れ、より抽象的な用語を使えば、生成、存在、消滅として説明できる（エントレス、シンメル、62）」という捉え方もあった。

(2) 「リスペス」の冒頭に付されていた詩は以下のようである。

Look, you have cast out Love! What Gods are these
　　You bid me please?
The Three in One, the One in Three? Not so!
　　To my own Gods I go.
It may be they shall give me greater ease
Than your cold Christ and tangled Trinities.
　　—*The Convert.*（Kipling（b）、1）

引用文献

Ageishi, Mikako.（a）“The Two Hans Breitmans: Rudyard Kipling and Charles Godfrey Leland,” *Hokusei review*. vol.45. 2006：123－131.

上石実加子（b）「キプリングの越境の詩学――“Bertran and Bimi”にみる混淆の文化表象――」北星学園大学文学部編『北星論集』第41号、2004年、71－81頁

――――――（c）「ペットになった＜動物/人間＞たち　放浪者たちの記憶」上石実加子『もうひとりのキプリング　表象のテクスト』松柏社、2007年、1－43頁

芦川和也「キプリングの東方幻想」橋本槇矩、桑野佳明編著『キプリング大英帝国の肖像』彩流社、2005年、75－97頁

エルドリッジ、ナイルズ『進化論裁判――モンキービジネス』渡辺政隆訳、平河出版社、1991年

エントレス、フランツ・カール/アンネマリー・シンメル『数は何を語るのか』橋本和彦訳、翔泳社、1997年

荻野昌利『歴史を＜読む＞――ヴィクトリア朝の思想と文化――』英宝社、2005年

ガリレイ、ガリレオ（a）『星界の報告』山田慶児、谷泰訳、岩波書店＜岩波文庫＞、1988年

――――――――――（b）『天文対話（上）』青木靖三訳、岩波書店＜岩波文庫＞、1993年

Kipling, Rudyard.（a） *Life's Handicap*. London：Macmillan, 1948.

――――――――――（b） *Plain Tales from the Hills*. NewYork：Doubleday＆McClure Company, 1899.

――――――――――（c） *The Day's Work*. New York: Oxford University Press, 1987.

キプリング、ラドヤード『なぜなぜ物語』辻田東造編著、ポプラ社、1974年

小堀憲『物語数学史』新潮社、1984年

佐倉統『進化論の挑戦』角川書店、1997年

シュワルツ、ジェフリー『オランウータンと人類の起源』渡辺毅訳、河出書房新社、1989年

高山宏『奇想天外・英文学講義』講談社、2000年

ダーウィン、チャールズ『種の起原（原書第六版）』堀伸夫、堀大才訳、槇書店、1989年

橋本槇矩（a）「キプリングの時代のキプリング」橋本槇矩、高橋和久編著『ラドヤード・キプリング作品と批評』松柏社、2003年、1－58頁

――――――（b）「解説」キプリング、ラドヤード『キプリング短篇集』橋本槇矩編訳、岩波書店＜岩波文庫＞、2006年、345－368頁

――――――（c）「橋を造る者たち」キプリング、ラドヤード『キプリング短篇集』橋本槇矩編訳、岩波書店＜岩波文庫＞、2006年、129－182頁

藤井元康『聖書創世記の記述は正しいか――宇宙・生命の起源と進化――』新風舎、2004年

プリンス、ジェラルド『松柏社叢書　言語科学の冒険④　物語論辞典』遠藤健一訳、松柏社、1997年

松永俊男『ダーウィンの時代――科学と宗教』名古屋大学出版会、1996年

宮尾レイ子「キプリングの児童文学　*Puck of Pook's Hill* から*Rewards and Fairies*へ」橋本槇矩、高橋和久編著『ラドヤード・キプリング作品と批評』松柏社、2003年、281－307頁

宮越俊光『早わかりキリスト教』日本実業出版社、2005年

山田慶児「解説」ガリレイ、ガリレオ『星界の報告』山田慶児、谷泰訳、岩波書店＜岩波文庫＞、1988年、155－173頁

山中勝義『激動ドイツ史』新風舎、2006年

ランケ、レオポルド『世界史概観』鈴木成高、相原信作訳、岩波書店＜岩波文庫＞、1998年